この子らと共に

－理解の輪の広がりを求めて－

編集者　伊丹市特別支援教育研究会　　発行者　伊丹市教育委員会

『伊丹市のたからもの』

尼崎市立下坂部小学校
校長　杉本　浩美

三年前に約三十年お世話になった伊丹市からお隣の尼崎の学校に異動しました。三十年の間に、本当にたくさんの方々にお世話になりました。先輩や同僚の先生方はもちろんですが、特別支援学校や特別支援学級、教育相談で出会った子どもたちや保護者の方々に本当にいろんなことを教えていただきました。一緒に考えたり悩んだり、笑ったり泣いたりしたことが、その後の私を作ってくれました。この場をお借りして改めて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

身近にあるとなかなかわからない宝物があります。伊丹市を離れて、そのことを改めて実感しました。

その一つめは、学校教育と保健、福祉、医療等が連携した取組がなされていることです。当たり前のことと思われるかもしれませんが、なかなかこの「横の連携」は、一朝一夕にできることではありません。システムを作り、そのシステムが機能して働くようになるのには、それに関わるたくさんの方の長い間の努力があってこそです。

二つめは就学前機関と小学校との連携です。就学時の教育相談がていねいになされ、保護者の方の不安を少しでも軽減し、必要な支援をつなぎ、スムーズな移行ができるようになっていることです。公私立問わず、幼稚園、こども園、保育所等と小学校が必要な引継ぎを行っているのは本当にすばらしいことです。個別の教育支援計画『ステップ★ぐんぐん』が、就学前機関で作られ、入学時に小学校にそれをもって来られるということもすばらしいことなのです。

三つめは障がいのある、あるいは支援の必要な子どもを中心に据えた取組が、ごく普通になされていることです。今でこそ「インクルーシブ教育」ということばで表されるようになりましたが、障がいのある子どもたちとたくさんの子どもたちが共に生活したり学んだりすることで、お互いが成長できるということを、ずっと以前から伊丹の先生方は大切にして、着実な取組を重ねてこられました。

長年にわたって特別支援学校と地域の小中学校との交流が盛んに行われていることもすばらしいことです。全国的には「交流及び共同学習」として学校間交流に力を入れて取り組まれていますが、伊丹市ではそれより一歩踏み込んだ居住地交流を伊丹特別支援学校の創立当初から進めてきました。

また、『この子らと共に』を編集している伊特研は特別支援学級や特別支援学校の先生だけでなく、伊特研の活動に賛同するすべての先生方によって構成されています。そして『この子らと共に』は、伊丹市民が、特別支援教育や障害児者福祉について理解を深めていくことを目的に発行されています。伊丹市で育つ子どもたちに関わるすべての人たちで共有していこうとする理念は、まさしくインクルーシブ教育システムの目指すところです。

これらの宝物を大切に、そしてもっともっとよりよいものにして、

次の新しい一歩を踏みだしていってください。伊丹市のすべての子どもたちが宝物となって、その子らしく輝くことができますように。そして、子どもたち自身がよりよい社会を作っていってくれることを心から願っています。

「本校の生活単元学習について」

伊丹市立桜台小学校
教諭　坂本　朋也

本校の特別支援学級（のびのび学級）では、生活単元学習の時間を設定し、「制作」・「交流」・「運動」の大きく三つに分けた領域を組み合わせて学習しています。

「制作」では、季節に合わせたものを作るようにしています。今年度は七夕の時期に折り紙を使って織り姫と彦星を作ったり、短冊に願い事を書いたりしました。三角に折るところ、斜めに折るところなど難しい折り方もありましたが、みんなで助け合って作っていました。子どもたちが作った織り姫と彦星の表情は十人十色で個性豊かなものになりました。そんな作品やそれぞれの願い事をお互い見合いながら、普段関わり合うことが苦手な子たちも良い顔でコミュニケーションをとっている姿にとても嬉しく思いました。

「交流」では、誕生日会や栽培などを通してたくさんのお友だちと交流する機会を作っています。誕生日会では、高学年が中心に司会を務め、会を進行しています。普段なかなか人前に立って大きな声で話せなかったり、落ち着いて活動することが難しかったりする子もいます。しかし、「誕生日の人に心をこめてお祝いしよう」というめあてのもと、最後まで一生懸命に司会進行したり、歌や拍手で会を盛り上げようとしたりしていました。そんな姿からみんなでお祝いしたいという強い気持ちがヒシヒシと伝わってきました。

「運動」では、たくさんのお友だちと体を動かして交流しています。今年度は、６月にミニ運動会をしました。運動会ではなかなか交わることのない異学年のお友だちとチームとなり、大玉転がしや玉入れ、綱引きなどを楽しみました。勝敗だけでなく、体を動かす喜びやチームの中で協力する楽しさを感じている様子でした。

毎週、子どものたくさんの成長が見られるのびのび学級ですが、本校では毎週「のびのびニュース」という通信にまとめ、保護者に活動内容や子どもたちの様子を伝えています。また、交流学級にも「のびのびニュース」を掲示してもらい、交流学級のお友だちにも活動の様子を知ってもらうことで、特別支援学級への理解を深める手立てとしています。

今後も自立活動の時間を大切にしていくことで特別支援学級だけでなく、学校全体の成長や理解につなげていきたいと思っています。

「ポンポン・ハイハイ！！」

伊丹市立緑丘小学校
教諭　久米　啓介

昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、学校生活の過ごし方や学校行事に大きな制約があるなかで、子どもたちは柔軟に変化を受け入れ、一生懸命取り組んでいます。現状を嘆くことなく、できることを精一杯に楽しみ、そこから最大限の学びを得る子どもたちの姿に刺激を受け、私たちも立ち止まってはいられないと突き動かされます。

伊丹市立緑丘小学校の特別支援学級（たんぽぽ学級）には、一年生五名、二年生十二名、三年生四名、四年生五名、五年生七名、六年生二名の計三十五名が在籍しています。私は、本年度から特別支援学級担任となり、主に一、二年生の子どもたちと多く関わってきました。生活単元学習としては、「わくわくワーク」と「たんぽぽ体育」に取り組んでいます。「わくわくワーク」では、季節の掲示物を作成し、たんぽぽ学級前の掲示板を飾ったり、おいもほりをしたりと、様々なことにチャレンジしてきました。

「たんぽぽ体育」では、緑小体操「ストーリー」を踊り、ラダーやボールを用いた基礎体力の向上を目指す運動をしてきました。また、運動会前には、リレーに向けて、チームに分かれてバトンパス、そしてコーンを回る練習をしました。「たんぽぽ体育」の時間に練習をすることで、自信をつけた子どもたちは、本番では今までで一番の走

りを見せました。達成感と充実感にあふれた表情で、交流学級のお友だちみんなと一緒に懸命にチームを応援するその姿は、とてもたくましく、輝いて見えました。

そんな運動会の練習で、私が担当する子どもの一人がよく、「ポンポン・ハイハイ！！」と楽しそうに踊りを見せてくれていました。これは、夏に児童くらぶの先生方が盆踊りをしている様子を窓から見て以来、「ダンス」を表す彼の言葉です。偶然か必然か、何かの巡りあわせなのでしょうか、彼の学年は、今年度はポンポンを使って運動会のダンスをすることになったのです。そんな運動会のダンスにいざ取り組むと、やはりダンスを覚えて踊ることは簡単ではなく、毎日繰り返し一緒に練習をしても、いざクラスのみんなと踊ると、なかなかタイミングやフリが合いません。この子がみんなと合わせて踊れるかということに囚われ、悩んでしまう時もありました。そんな時に、ふと練習中の彼を見ると、それは楽しそうに、はじける笑顔で、「ポンポン・ハイハイ！！」と踊っていました。

「ダンスを楽しむ」

そんな、ダンスを上手に踊るよりもっと大切なことを実践している彼の姿に感銘を受けました。あれこれと難しく考えずに、身体全体で楽しく一緒に踊っていくうちに、フリを覚えていった彼はすっかり自信をつけ、本番ではお友だちや保護者が上達に目を見張るほどのダンスを披露しました。

一緒に繰り返し練習し、自信をつけて臨んだリレー。そして、楽しく元気に練習し、心と身体全体で「表現」したダンス。短縮された運動会でのたった二つのプログラムではありましたが、そのどちらもが、見通しが立たず不安に満ちた私たちに、キラキラ輝く希望の光を与えてくれました。みんなの心をパッと明るくするその力を、再認識させられた運動会でした。

「子ども達との関わり方について」今思うこと

伊丹市立天王寺川中学校
教諭　広瀬　雅子

特別支援学級担任として思うことがあります。学級生徒の障がいの種別・程度は様々であるけれども、生徒も自分の特性を理解し、自分の弱さや強さを受け入れ、自立するには時間がかかるということです。そして、保護者の方々もお子さんの特性をわかってもらえない苦しさや、親としてどのように接していくべきかという葛藤を抱え生活している人が多いように思います。ただ、お子さんも保護者の方々も本人の特性を周囲の人たちに受け入れられると、苦難や悩みは和らいでいきます。特性を持つ友達のことを「個性だと思っている」と中学三年生のお子さんが言った一言が今でも心に残っています。また、中学一年生のお子さんはコミュニケーションが上手くとれない、距離感がうまく取れず、気を引くために相手に嫌がることをする友達に「しゃあない。しゃあない。」と言ってくれます。誰でも、自分を理解してくれる存在が多いほどいきいきと生活を送ることができるのではないでしょうか。私は、このようなやり取りを見ていると徐々に人権意識が若い世代に広がってきていると感じます。しかし、「みんなと同じようにできないこと」を「同じようにできなくてもいいんだよ」という時代になるにはまだ時間がかかるという現実を感じてしまうことも否めません。そのような中、私にできることは、学校が楽しく行きたくなる場所にするために努力することであると感じています。

通常学級においても支援を要する生徒がいます。通常学級の中で学習や生活をしていくことに困難さを抱えている様子がたくさんうかがえます。まず、その生徒たちを見逃さず、どんな手立てをしていくべきか各学年で話し合う機会を年数回設けています。環境や授業のユニバーサルデザイン化等、声かけ、見守り等で、さりげなくサポートし、安心して学校生活を送れるように教師一丸となって取り組んでいます。学校生活の「楽しさ」を感じてもらうためにまずは、教師が生徒一人ひとりの特性を理解して接することが大事です。そして、周囲のお子さんの人権意識や思いやりの意識が広がっていくことを願い、これからも特別支援教育の充実のために尽力してまいります。

「子どもたちとの関わり方について」

県立こやの里特別支援学校
教諭　前田浩平

私は昨年まで、市立の特別支援学校で7年間勤務していました。重度の知的障害と肢体不自由を併せもつ児童生徒の多くは言葉でのコミュニケーションが難しく、身体を通した指導・支援が、私の関わり方の基本になっていました。

今年の4月にこやの里特別支援学校に赴任し一番驚いたのは、子どもたちが教師の指示を聞き、自分なりに考えて行動できることでした。だからこそ、支援をする際には言葉だけで促すことが多く、当初は、失敗の連続でした。

赴任してから8か月が経った現在でも、言葉で伝えることの難しさを常に感じています。しかし、4月当初とは違い、言葉で上手く伝わらなければ、今まで通り優しく手を取り、徐々にその手を離していけば良いのだと気づくことができました。今後も、子どもたちの成長を促せるような最善の支援を常に模索していければと思います。

「子どもの可能性を伸ばすために」

県立こやの里特別支援学校
教諭　阪井あかね

今年度からこやの里特別支援学校に赴任し、高等部2年生に配属されました。学校生活も残り少ない子どもたちに、どう向き合えば良いのか、出来ることは何なのかと模索する毎日です。周りの先生方と情報を共有する中で、常に意識して取り組んでいる事は「子どもたちが自ら考えて自分で出来る事を増やす」という事です。4月に先輩教員から「過度な支援は子どもの可能性を伸ばすことができない、信じて待つことも支援の一つ」と教えて頂きました。その言葉がとても印象的で、より子どもたちが主体的に行動できるような手立てや支援ができているのかを多角的・多面的に考える習慣が付いてきたと感じています。まだまだ上手くいかない事や失敗だなと感じる日々ですが、しっかりと子どもたちに寄り添い、未来へ一歩踏み出す後押しができる教員を目指していきたいと思います。

「交流及び共同学習」について

伊丹市立伊丹特別支援学校
教諭　南川宗貞

本校では、児童生徒居住地の小中学校と交流及び共同学習を行っています。普段の学習に参加したり、体育大会や音楽会等の行事に練習から参加したりする等、児童生徒の実態に合わせて交流を行っています。本校の児童生徒にとって、実際に同世代の友達と一緒に同じ空間で時を過ごすことは普段できないことを体験できるとても大切な機会です。

昨年度入学した小学部の新入生も交流を計画していましたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響を受け、交流校に行くことができませんでした。新入生にとっては、居住地校との繋がりを作る大切な一年目になるはずでした。

そのような中、交流校と打合せを行い、それぞれの受入学級と手紙での交流を行うことになりました。最初は本校から児童の自己紹介カードを作成し交流校へ送付しました。交流校からはクラスメイトの自己紹介の手紙や掲示物が返事として返ってきました。交流学級の一年生にとって会ったことがない人に手紙を書くことは難しいことだったと思います。色々な工夫をして取り組んで下さいました。

自己紹介の後は特別支援学校のことや児童の学習の様子を写真やクイズを使って手紙を作成して伝えました。本校から手紙を送り、交流校から返事が返ってきて・・・という形で積み重ねました。

二年生になった今年度は、交流学級は変わりましたが、手紙に加えて動画も送り合うなどして交流を継続しています。まだ交流校には行きにくい状況が続いていますが、全く行けないということではなくなってきています。児童生徒のことを知ってもらうのはもちろんですが、特別支援学校には小学校で学習している教科学習があるということ、体育館や図書室、図工室や音楽室などの教室があることなど、小中学校と同じことがたくさんあるということも伝え、児童生徒、特別支援学校が身近な存在であるということを伝えていきたいです。そして、交流を継続することがお互いを認め合い、共に成長していけるような仲間作りの一助になればいいなと思います。